

【プロローグ】

「お前は勇者にはなれんよ」

じいちゃんのその言葉を聞いた瞬間、全身から血の気が抜けていくようだった。

「な、なんでさ。そんなのやってみなきゃ……」

「やらんでも分かるわい。だってお前向いとらんもん」

いくら先代の勇者だからって何がわかるんだ、と思った。

自分で言うのもなんだが、俺だって頑張ってきた、つもりだ。

かの魔王の首を一撃で両断した程の剣の腕前を持つじいちゃんから剣術を学び、魔法だって一通り覚えた。日々の鍛錬だって欠かしたことは無い。

なのに、なんで、おじいちゃんは――

「それにな……」

「もういいよ！！」

じいちゃんが再び何かを言いかける前に俺はその場から逃げるように駆け出した。

じいちゃん――あの最悪の魔王の首を取った史上最強の勇者を、これ以上何かを聞くことで嫌いになりたくなかったから。

――というのは建前で、本心からいえば俺の、自分自身の小さなプライドを守るためだったと思う。

「こりゃ待て！ レオン！！」

じいちゃんが俺を呼ぶ。

――待たない、待つはずがない。

取るに足らない、小さなプライドを傷つけられた俺は無謀にも家を出た。

もう二度と、帰ってくるものかと。

[場面転換、走る演出]

外は雨だった。

泥濘んだ地面を蹴るたびに泥が飛ぶが、気にせず走った。

生まれ育った村を今まさに出ようとする直前、昔馴染みの婆さんに声をかけられた。

「あら、勇者様のとこのお孫ちゃん。こんな雨の中どこへ——」

その言葉を振り切るように、俺は婆さんを見殺しにして思い切り村の出口を駆け抜ける。

違う。

違う。

違う——！

俺の小さなプライドに付いた傷口が、ずきずきと痛むたび、湧いた怒りが脚に力を増していく。

俺は「勇者の孫」なんて名前じゃない！

どいつもこいつも、俺のコトなんて見ちゃいないんだ。

じいちゃんの、勇者の栄光が、俺の存在を根こそぎかき消している。

だったら、なるしかないじゃないか。勇者か、それと同じか、それより大きい何かに。

俺は雨なのか涙なのか分からないくらいに濡れてぐちゃぐちゃになった顔で叫んだ。

「——俺は！！」

俺はここにいるぞと、

「俺の、俺の名前は！！」

存在証明を、生の証を叫ぶように。

「レオンハルト・ノットガイルだ！！」

【Chapter.01】

「うおあツツ！？」

俺は素っ頓狂な声を上げながら目を覚ました。

——嫌な夢を見た。思い出したくもない、昔の夢を。

動悸が収まらないので深呼吸をする。

深く息を吸い、そして吐く。それを何度か続けると、悪夢で乱れた心が段々と落ち着いてきた。

「ふう……ん??」

心が落ち着くと同時に、寝起きの頭がスッキリしてきた。……が、違和感を感じる。

「ここどこだ？」

目覚めた場所は、俺が寝泊まりしてる宿屋とは違う場所だった。いつものボロ宿ではなく、少し高級そうな小綺麗な部屋——俺の身分では泊まれそうにない部屋だ。

「なんでこんなとこ……って痛ったア！？」

自分が不可解な状況にあると理解した瞬間に、激しい頭痛が俺を襲う。これは多分昨日飲みすぎたんだな、と経験から分析。酔った勢いで違う宿に入っちゃったみたいだ。

「やっちゃったア……でもまあ高そうなとこだし朝飯くらいサービスしてくれんだろ」

やっちゃったモンはしょうがない。ならどーするよ？

……享受しまえばいいじゃん、サービス。

と、いうワケで俺は朝飯を食うためにベッドから出ることにした。高級そうなシルクの手触りが名残惜しい——

「ん？」

身をよじった俺の手に違和感を感じる。柔らかくて暖かな何かに触ったような……？
違和感の方向に目をやると、掛け布団に不自然な膨らみ。

——これは、まさか。

慌てて布団を一気に剥がすとそこには——

「やば」

裸の女がすうすうと寝息を立てていた。
紫色の少し乱れた長髪がとても豊満な肉体に絡みついでいて、なんかすごくエッチだ。
顔もすっげえ美人。ちょっと性格キツそうだけど。……少し下くらいかな、歳は。

「やっ」

つまり俺は。

「やっ……」

この娘と。

「やった—————！！！！！！！！」

やったのだ。俺は喜びのあまり両腕を天に突き上げた。
一生素人童貞だろうと思ってた俺の人生に春が来たのである。雄叫びを上げずにはいられないだろう。何も覚えてないけど状況証拠的に確実だろコレ。

ごめんな娼館の女の子たち。俺、普通の男の子になります。今後も行くけど。

「ううん……」

おや、女の子が目を覚ましそうだぞ。ここはできるだけ声を低くしてダンディに対応するんだ……頑張れレオンハルト、ワンナイトをエブリナイトにするんだ！！

「お”、お”はよう！」

バカ。変な声になっちゃったよ。

「ああん……？ ああ、おはよ。……ふあ」

女の子は身体を起こすと大きく伸びをした。身体の動きに合わせてその豊満な胸がばるんばるん。

……でっか！！！！

「……なあに？ 昨日あんなに揉んだのに、まだ足りないのかしら？」

女の子はこちらの視線に気づくと悪戯っぽい笑みを浮かべて腕をよせて胸を強調してきた。

正直たまらん。

「いや、ハハ、揉みたいのは山々なんですけどね……その、君は……」

「ヴィオラよ」

ヴィオラと名乗った女の子は、服を着つつ短く答えた。ああ、もうちょっと裸でいて欲しかった……。

「ああヴィオラちゃんね！ ごめんごめん、でその、俺と君は、その、なんだ……」

「やったわよ」

「だよねえ！！」

おバカ！！！！ 何聞いてんだ俺！！！！ わかりきった事を聞いてんじゃないよ！！！！

「そう、やったの」

ヴィオラは椅子に腰掛けると、その足を大げさに振り上げて組み、さらに続けた。

「初めて、だったのよねえ」

「マジ！？」

「マジよ」

驚いた。昨晚の俺は処女とワンナイトキメたらしい。すごいな、どうやったんだ。

「で、改めて自己紹介。私はヴィオランテ・ヴァイオレント・ヴィオレット。かの気高きヴィオレット公爵家の――」

……ん？ 今公爵って言った？？？ おかしいなア俺まだ酔ってる？？？

「御令嬢よ。……責任、取ってね♡」

聞き間違いじゃなかった！！！！

「マジかよオ！！！！！！！！！！？」

――あー、話の途中だけちょっとここでイントロダクション入るよ。ハイご清聴ください。だって第一話のクライマックスよ？ ここでドカンと言っておかないとさ、君ら主人公の目的は何なの？とか色々言うでしょ？そんで読まなくなるんだ……知ってるんだぜ俺。

……ワンナイトから始まる恋があったっていい。なら、ワンナイトから始まる冒険譚だってあってもいいよな？

――そう、この話は勇者の孫ってだけのクズで風俗大好きなロクデナシこと、この俺レオンハルト・ノットガイルが……

……本当の、「勇者」になる話なんだぜ。

――前回までのあらすじ。

女の子をハメたつもりがハメられた。以上。

「貴族の処女を奪ったんですもの……責任とらないとどうなるか、わかるわよね？」

「あー待て待て待て、待て、一旦落ち着こう。そうだ、君と俺はやってないかもしれない。万が一君が処女だったとしたらシーツに血がついてるはずだ。ほら見てみなよ、血なんて一滴も……」

バツと布団を剥ぎ取って中を見してみる。……あ、ついてる。

「ついてねえだろ？」

「ついてんじゃない」

「ああそうだねってクツソ！！」

嘘つくときは堂々とつけば意外とバレないって言った奴誰だよ普通にバレてんじゃない。

「俺は責任なんか取らないからな！！俺は悪くない！そう！お互い酔いすぎて犯すハズのない過ちを犯しちゃったんだ！だからお互い忘れよう！こんな野良犬みたいな奴隷兵なんかと一緒にしてもなんの得にもならないぞ！！それこそ犬に噛まれたとでも思っさ！な！忘れろ～！忘れろ～！……ほら、だんだん忘れてきたんじゃないか？？」

ヴィオラへ両の手のひらを向けて、忘却魔法が出るように念じる。

詠唱はわからないが必死にやれば何か出ると思う。出ろ！……出ろ！！

「さっさと責任取るとチンポ切り落としてからありとあらゆる拷問の後に晒し首になるのどっちがいいかしら？」

ダメでした。じゃプランB！

俺は静かに両ひざをつくと、できるだけ美しい所作で両の手と頭を床につける。

「誠にごめんなさい！許してください！責任取りたくないんです！！」

——そう、土下座である。俺はこの土下座で借金の取り立てから見逃してもらったことがあった。まあその晩にその街から逃げただけだ。

この芸術的土下座を持ってすれば地獄の悪鬼羅刹でさえも俺に許しを

「……ナイフかハサミ持ってたかしら。」

「あー待って待って待って！ごめん！！取る取る、取るよ！責任！！」

ヴィオレット家といえば武名がぐわんぐわん轟くような暴力装置を排出し続けるヤバい家、それくらいのことは俺でも知っていた。これ以上の抵抗は死より恐ろしい何かを意味するだろう。

「最初からそう言えばいいのよ」

ヴィオラは呆れながらそう言うと、何やら胸の谷間(ドレスでおっぱいが強調されてとてもエッチだ！)に手を突っ込んでごそごそ弄ると、そこから一枚の羊皮紙と羽ペンを取り出し、俺に向かって放った。

「さ、とりあえずこれにサインなさいな」

婚姻届かな。でもよくよく考えたら帝国貴族の娘と結婚できるってすげえチャンスなんじゃね？

今の俺の身分から一気にランクアップできるワケだし、悪いどころか良いこと尽くめなんじゃね？ ——と思っていた俺の希望は見事に打ち砕かれることとなる。

「私、レオンハルト・ノットガイルはヴィオランテ公爵令嬢様の忠実なる下僕として死ぬまで仕えることをここに誓います”……だあ！？」

目を通した書類にはとんでもないことが書かれていた。

「あら、奴隷兵の癖に字が読めるのねえ？ 意外だわ」

「なめんな！ 俺ああの勇者ナイトハルトの……いや……何でも、ねえ」

言いかけて止めた。

家出するほど嫌だった『勇者の孫』というレッテルを自分から利用しようとしたとしたからだ。——今の俺の顔は自己嫌悪でめっちゃ渋くなってるだろう。

するとヴィオラは性格の悪そうな微笑を浮かべて言った。

「孫、でしょう？」

「——！？」

「あんたの事は全部知ってるわよ。——レオンハルト・ノットガイル、オフレッサ村出身の22歳、勇者ナイトハルトの孫。冒険者になるも全く芽が出ずに所属パーティーから追放、その後多額の借金を抱え奴隷兵に身を墜とした……合ってるわよねえ？」

「なんで、俺のことを、知ってるんだ」

過去のトラウマと見ず知らずの女にそれを知られていることへの衝撃でしどろもどろになった俺を嘲笑いながら、ヴィオラは俺の疑問に答えた。

「私これでもえら〜い軍人だから。使えそうな奴は覚えとくことにしてんの。私の高貴な脳味噌の片隅に置いて貰えるんだから、光栄に思うといいわよ？」

……え、偉そうな女だ……。

しかしここで俺にも余裕が生じる。あまりにもこの女が見当外れのことを言うからだ。

「……はん、俺が使えそう？ 冗談キツイぜお嬢ちゃん……ええと、煙草は嫌いかな？」

「好きに吸いなさいな、私もそおんな安物じゃないけど吸うから。煙管でね！！」

「そりゃどうも」

ヴィオラの貴族マウントを軽く受け流しながら俺はベッド横に置かれた煙草に魔法で火を点ける。煙草はいい。昂った神経、纏まらない思考、漠然とした不安。そういったモノを一掃してくれる神の草。

ちなみに俺はこの『リヒト・ブリッツ』を愛飲してる。一番安くて一番キマる、低所得者層の強い味方だ。今住んでる宿は常にこいつの匂いがする。

煙を深く吸い込み、少し留めてからゆっくりと吐き出す。

——いよし、充填完了。見てろ高飛車女、こっからはロジハラの間だけ。

「……大方俺が勇者の孫だから近づいたんだろーが、残念だったな。俺ア勇者の才能なんて微塵もありやしねエ出来損ないだ。なんならホンモノの勇者からのお墨付きまで貰ってる」

「いや、違うけど」

「カカツ、そうだよな。俺に近づいてくる人間なんて……って今なんつった？」

「違うわよ。」

「違うって……ええええええええ！！！？ 違うのオ！！？」

「ハッ、勇者本人ならともかく孫なんてなあんの価値も無いわ。歴代勇者の血族なんて掃いて捨てるほどいるんだから。血筋で受け継がれる力だったら今頃帝国は勇者の巷よ」

ヴィオラは俺の衝撃を一笑に付すとさらに続ける。

「というか……アンタも子孫なら聞いてんでしょ？ 勇者は国の儀式でようやくその力を得るってコト」

「それはまア……じゃあ尚更なんで——ハッ！？ も、もしかしてあたしの身体が目当てなのオ！！？ 下僕にして、あたしの肉体を好きに弄ぶつもりなのねエツ！？ くっ、外道がッ！！ 大きさと回数には自信ありまっす！！」

「アホ」

「いてッ」

殴られた、割と強めに。

「んなワケねえでしょ。——あんた、奴隷兵になってから何年になる？」

「あ……？ 丁度五年ってとこだが」

「ちなみに奴隷兵って一年目でどのぐらい死ぬかわかるかしら？」

「……ほぼ全員」

「そう、奴隷兵に墮ちた人間の九割は一年も経たずに死んでいく。——五年経ったら、何人残るのかしらね？」

「……今じゃ俺一人さ。」

奴隷兵の致死率は異常に高い。

帝国軍の肉壁たる俺たちは、ロクな訓練も受けずに魔王軍との前線に投入され、あたら安い命を散らしている。

その中で運よく生き延びちまった俺は、少しだけ他の奴隷兵達より良い暮らしをしているのだった。——だから、奴隷のくせにフラフラ遊べるワケだな。

「それよ！ 史上そこまで生き残った奴隷兵はね、あんた一人！！ こんな貴重な人材この私が放っておくワケないでしょうが！」

熱っぽい口調でヴィオラは語る。

「あんたに私の脳みそをやるわ、だからあんたの身体私に寄越しなさい！」

——沁みるなあ。

俺を勇者の孫じゃなくて、俺自身として見てくれた人間はいつぶりだろうか。

彼女の一言一句が、俺の承認欲求を満たしてゆく。気持ちがいい。このまま彼女の契約を受け入れて、正規の兵士として働くのも悪くないだろうと思ったら、自然と手が契約の羊皮紙に伸びていった。

さらさらと名前を記入し、ヴィオラに契約書を手渡す。

「ほらよ。……これからよろしく願いいたしますよ、ご主人様？」

「あら素直！ いいわよ、これから死ぬまでコキ使ってやるから覚悟しなさいよね！」

笑顔で羊皮紙を受け取るヴィオラからのありがたいお言葉をいただく。言葉尻に

「いやホント」

と小さく聞こえた気がするが俺は深く気に留めることもなく、清々しい気分で伸びをした。

「よっしゃあ！ これで奴隷生活ともおさらばかア～～！」

「ああ……そのコトなんだけど」

「ん？」

ヴィオラが申し訳なさそうな笑顔で言う。

「そろそろ迎えが来るから、服着なさいよ」

「あ、そうか。すまんすまん、今着るから」

「早くしてね～」

そういえばずっと全裸だった。全裸のままちょっとシリアスな話とかしたワケだけれども、この絵面って完全にギャグだよな。恥ずかしッ

——そんなことを考えながら服を着終わった後、ふと思った。

……ちょっと話が美味すぎじゃないか？

貴族のご令嬢(しかも処女！)とヤッて、しかも帝国軍への引き抜き？ 俺が？

「ヴィオラ——」

一抹の不安を覚えた俺はヴィオラに事の詳細を聞こうとしたが、それは荒々しく扉を叩く音にかき消された。

『ヴィオランテ・ヴァイオレント・ヴィオレット！！ここに居ることはわかっているぞ！！大人しく投降しろ！！』

「——あの」

『貴様には王宮及び宝物庫の破壊！並びに聖女様への反逆罪他多数の容疑が——』

「ご主人様？」

俺が苦々しい顔をヴィオラに向けると、彼女は落ち着き払った様子でニヤリと笑いながら言った。

「下僕」

「何でしょうか」

「逃げるわよ」

ヴィオラは俺の襟首を掴むと、一目散に窓へと駆け出す。

うげげげげ！ 浮いてるよオ！俺の身体ァ！！こいつホントに女か！？

そしてその勢いのまま飛び上がり、窓を蹴り破った。大きな音を立てて窓ガラスのブロックが碎けて崩れて散らばり宙に舞う。

『突入————ッ！！』

眩む視界の端に、今までいた部屋に雪崩れ込む衛兵の姿が目に入った。

「下僕ウ！ 耳塞いでなさい！！」

契約書の効力か、生への執着か。身体が自然に動いて意味の分からぬまま耳を手で塞いだ瞬間——

「【爆ぜよ】ッ！！」

ヴィオラが指を鳴らし、部屋が衛兵ごと爆発した。その余波で俺たちは向かいの建物の屋根まで吹っ飛ぶ。

「あっはああああああ♡ 気ン持ちいい—————ツ♡」

「ギャアアアアアアアアアアアアッ!？」

——女に騙されるのは何回目かなア。ひい、ふう、みい……。

十三回指を折った後、考えてもしょうがないので俺は考えるのを止めた。

「てめェよくもッ、騙しやがったなッ!!」

「人聞きが悪いわね、貴族で軍人だったのは本当よ？」

「過去形じゃねえか!! それを騙したつつーんだよ!! このオ、犯罪者がァ!!」

ヴィオラの恐らく魔法——で吹っ飛ばされた俺と彼女は屋根から屋根へと飛び移り、全力疾走していた。行き先? 知らねえよそんなの。多分地獄だと思うな、俺は。

地上では衛兵がうじゃうじゃ追っかけて来てる。進むも地獄、退くも地獄だ。

「はいはい悪かったわよ。……でもいいの? 私に騙されなかったら、あのまま奴隷兵として野垂れ死ぬのを待つだけだったと思うけど?」

「ぐっ……それはそうだけだよ」

ハイここで俺から説明します!

俺達奴隷兵は一回なっちまったら死ぬまで奴隷兵なんだ! 這い上がるチャンス? 無いです。普通の奴隷とは違って自分を買い戻すコトはできないよ。だって俺みたいなクズの命を少しでも有効活用するための制度だもの。くたばれ帝国。

ちなみに脱走は死罪。くたばれヴィオラ。

「フッフ、そうよねえ? わかったらとにかく走んなさい。街の外に馬車を待たせてあるからそれで脱出よ」

「脱出ウ? どこへ? 帝国のどこに逃げてても一緒だろ」

「……な—いしよ♡」

「クソォア！！ ムカツク！！」

可愛さ余って憎さ百倍とはコイツのためにある言葉だと思う。

「さ、そろそろ降りるわよ。風魔法は使えるかしら？」

「使えません！」

「チッ、しょーがないわねえ。——跳ぶわよ！ 掴まんなさい！！」

屋根の切れ目からヴィオラが跳んだので、それに続いて俺も跳んで両腕でヴィオラの腰をキャッチする。尻に顔を突っ込む形になったがこれは不可抗力だ。いいね？

……あーやわらけ。ここが桃源郷かな？ やっぱ身体は最高だなコイツ。

「ちょ、おま、下僕！！ お尻に顔擦り付けてんじゃねえわよ！！」

「うっせえ！ お前今んとこ身体しかいいトコねェんだからいいだろこんぐらい！！」

「~~~~ツ！ 後で殺す！！」

自由落下していく身体をヴィオラの魔法によって地面に激突する前に少し浮かすと、俺たちは無事に着地することができた。

「ふう、堪能したぜ」

「覚えてなさいよあんた……チッ、はいこれ」

初めてヴィオラの顔が歪む。ざまあみやがれクソ女。

が、切り替えが早いようでまた胸の谷間に手を突っ込み、今度は何やら一振りの剣を取り出して俺に渡してきた。……収納魔法かな？

「なんだよこれ」

その剣は太めの刃が紫色に輝き、何やら蠍と山羊の意匠の入った……芸術品のような長剣だった。

「武器よ武器。これから街門突破するんだから持ってなさい。……行くわよ」

「お、おう」

状況に流されるまま、俺は駆け出すヴィオラの後を追いかけるのであった。

程なくして、街門の前にたどり着いた俺たちだったが、案の定そこは衛兵によって固められていた。

「どうすんだよこれ」

「突破するって言ってんじゃない」

話になんねえな。

「いたぞ！！ 包囲しろ！！」

追いついてきた憲兵と門の衛兵に俺たちは取り囲まれた。

「おい、何か策はねエのかよ元軍人様。囲まれちまったぞ」

絶体絶命の状況、打開するにはもうヴィオラに何か考えがあるかを祈るしかない。

「それとも魔法で何とかしてくれんのか」

「あー、駄目ね。爆破魔法は私たちまで巻き込むから、直接戦闘しかないわ。気張んなさいよ」

「そうかよ」

……ダメだな。期待した俺がバカだった。

あまりに自信満々なもんだから、きっと何か秘策があるもんだと思ってたがとんだ期待外れ。誇大妄想の口だけ野郎だったみたいだ。

——こんな奴と心中なんてしてやるものかよ。

そう思った時、俺たちを囲む兵士の一人が言った。

「大人しくお縄につけ！ ……そうだそこの奴隷兵！ その女を渡せば貴様の脱走は許してやってもいいぞ！」

そうか、そうか。俺は生き残れるんだな。

それに対しヴィオラはあくまでも勝気な様子で言い返した。

「ハッ、私が大人しくするわけじゃないの。さあ押し通るわよ下僕——」

「悪いな」

俺はせめてもの謝罪を添えて、ヴィオラの腕をひねってから足を払い、地面に押し倒してその白磁のごとき首筋に先ほどの剣を当て拘束した。

「痛ッ……！？ あんた何をッ……！？」

ヴィオラの顔が痛みと怒りで歪んでいる。

いい気味だ。

「こちとらお前と一蓮托生なんてゴメンなんでな。憲兵に引き渡させてもらう」

「馬鹿じゃないの！？ あいつらの言うこと信じてるワケ！？」

「お前よりはな。マシだ、だいぶだいぶマシだ。俺は少しでも生き残りたい、どんな手を使ってもな。——だから今まで生き残ってこれた」

そうだ。俺はどんな手を使っても生き延びてきた。

奴隷兵の仲間を見殺しにした、時には盾に使った。

強い奴、偉い奴の靴を舐めた。

とにかく死にたくなかった。だってそうだと、死んじまったら全部お終いだ。なりたかったものにだって——あれ、俺は、

——何になりたかったんだっけ？

「あ、そ」

ヴィオラは冷めたような顔をして、俺から視線を外した。

「でもいいの？ あいつらあんたの名前なんて微塵も覚えちゃいないわよ」

「……それがどうしたつつうんだよ」

「ただ生き延びるだけなら誰だってできるわ。そこから特別になろうとすんなら、多少のリスクを冒してでも危険な賭けに出るべきじゃないのかしら」

「さっきから何をごちゃごちゃ言って——」

「なりたかったんでしょ？ 勇者に」

「——ッ！！」

そうだ。俺は——俺は、勇者になりたかったんだ。

なんで今まで忘れてたんだらう。

……いや違う。目を逸らしてたんだ。
家出してから冒険者になって、挫折して、奴隷兵に成り果てて。
二度と叶わない夢に相對するのが辛かったから。

「……ね、チャンスっていうのはそうそう何度も降りてこないのよ」

「……ああ」

「降りて来たんなら、掴みなさいよ。……ま、好きにしまさい。こうなったのは私の落ち度だから、是非もないわね」

そう言うと、ヴィオラは観念したように目を閉じた。

——俺は、どうすべきなんだろう。

ふいに、昔じいちゃんがよく聞かせてくれた詩を思い出す。

二人の囚人が鉄格子の窓から外を眺めてた。一人は泥、一人は星を見た。

——俺はどっちなんだろうな。

すると、憲兵の一人がこちらへ駆け寄ってきた。

「おお！ よくやったぞ奴隷兵！！ さあ、その女をこちらへ渡すんだ」

ああそうだ、前から聞いたかったことがあるんだ。

「あの、憲兵さん」

「なんだ？」

「俺の名前、言ってみてくださいよ」

「……何を言ってる？ 奴隷兵の名前なんぞ一々把握してるわけがないだろう」

「はは、そうっすよね」

そうだ。奴隷兵の名前など、誰も覚えちゃいない。

明日をも知れない夜露のような命。命というには余りに無価値な、死ぬための夢より儂い何か。

そんなのは嫌だ。俺は俺だ。

奴隷兵なんて名前じゃない。俺の名前はレオンハルト。——レオンハルト・ノットガイルだ。

ならば、どうする。選ぶべき道は二つに分かたれた。

さあ、お前は どうするんだ。レオンハルト・ノットガイル。

——そんなの決まってる。俺は……

「おい何してる！ さっさとその女を”ツ」

星を見ていたい。

業を煮やして近づいてきた憲兵の首が飛び、血を撒き散らしながら宙を舞って地面に落ちた。

下手人は……もちろん俺だ。

「きっ、貴様ア！？ 一体何の真似だ！？ 自分が何をしているかわかっているのか！！？」

囲みの中からそんな声が聞こえる。知らねえよ、そんなの。
俺はヴィオラの拘束を解き、彼女の手をとって共に立ち上がる。

「……悪かった。」

ヴィオラは一瞬呆気にとられたような顔をしていたが、すぐに普通の不敵な顔で笑った。

「ま、今回は許したげるわ。——行くわよ、下僕」

「下僕じゃねえ。名前で呼べよ」

「は？ 面倒くさいわねあんた」

「長かったらレオンでいい」

「しょーがないわねえ。……じゃ、行くわよ。レオン」

「あいよ」

俺たちは並んで歩き出す。そして少しずつその歩調を速め、兵士の侍る街門へと走り出した。

「来るぞッ！！ 何としても奴らを逃がしてはならん！！」

突然の同僚の死に同様していた兵士たちだったが、隊長格であろう一人の号令によって平静を取り戻すと、一斉に俺たちへ迫りくる。

剣十、槍二、盾なし、弓なし、魔術師なし。

——勝機、あり。

「ほらよ、返すぜ！」

俺は走りながら拾った先ほどの兵士の首を向かい来る兵士の群れへ投げつけた。
するとそれは残っていた血液を散らしながら先頭の兵士へと直撃。少しばかりの動揺が奴らに走り、足が止まる。

——は、止めたな。足を。

俺は脚に力を込めて加速、そしてその勢いそのままに剣を振る。

また一人首が飛ぶ。兵士どもが軽装で良かった。

続けざまに首無しの死体を蹴って正面に飛ばして兵士の足を止め、側面から斬りかかる兵士のそれを避けてその隙間をすり抜け前進する。

そういえばヴィオラはどうしているだろうか。ちらりと後ろを確認してみると……

「冗談だろ……」

飛んでいた。空中を。いや走っているのか、足の裏で超小規模の爆破を繰り返して。

最後に少し大きめの爆破が起こると、丁度俺の真横に彼女は着地した。

「見てたわよ。なかなかやるじゃない」

「お前足の裏どうなってんの??」

「細かいこと気にしてんじゃないわよ！ さ、行くわよ！！」

「へいへい」

後ろから追ってくる兵士を除けばあとは眼前の門を守る槍兵のみ。

「一人一殺でいいわね？」

「おうともさ」

俺の返事を合図に二手に分かれて前進する。目標はお互いの目の前の槍兵だ。

俺たちが寄ってくるのを見て、槍兵がその得物を構えて俺を串刺しにせんとする。

その間合いまであと三步、二歩……一歩！！

「死ねえっ！！」

間合いに入った瞬間に槍が飛んでくる。が、見える。

俺だってそれなりの修羅場は潜ってきたんだ、これぐらい避けられなくて、どうするってんだよ！！

——穂先が顔を掠め、傷から血が垂れる。

自然にヒュウツと口笛が出た。偉いぞ俺、よく避けた。

そのまま槍が戻る前に相手の懐に入り込んで狙うは……つぶらなお目目だ。

よう、俺のデカいのを、お前の穴にブチ込んでやるぜ。

「うおらアツツ！！」

低くした姿勢から、真っ直ぐ相手の眼球目掛けて突くと剣を通して嫌な感触がする。ホール・イン・ワンだ。

「いぎゃあああああああああアツ！？」

まだイかないのか？欲しがりちゃんめ、もっと奥までくれてやるよ。
さらに力を込めて押し込むと、そいつは一際大きく喘いで息絶えた。

——さて、ヴィオラの方はと。

「【爆ぜよ】ッ！！」

「うおぶッ」

……爆破魔法を手のひらに集約させて人間を爆ぜさせたのか。
うわあ止めて欲しいなァ……肉片と内臓飛び散りすぎ！！子供に見せらんないよコレ。

「片づけたわね！じゃ破るわよ！門！！」

「どうやって破るの？……いややっぱいい、大体想像つくよ」

「もちろんコレよ！【爆ぜよ】ツツ！！」

ヴィオラは両手を門に当てると爆破魔法を唱えた。衝撃と破片に備える……。
が、衝撃は外にいくように調整したようだ。やはり天才か。

「そして逃げる前にィ——もう一丁【爆ぜよ】ッ！！」

ヴィオラは後ろを振り返ると、迫りくる残りの兵士たちの集団を爆破した。
うわあ、子供の頃爆竹で芋虫の塊吹っ飛ばしたコト思い出したわ。かわいそ。

「これでOK！さ、行くわよ！！レオン！」

「ちょッ、引っ張るなって！引っ張るなら股間についでるもう一本にして！！」

「死ね！！」

破壊された門を、ヴィオラに引っ張られながら駆け抜ける。

これで名実ともに帝国のお尋ね者だが、心は晴れやかだった。重い荷物を降ろした時のような
——そんな気分。

せっかくだ、もう一度頑張ってみよう。今度こそ俺はなるんだ。何かに。

そう決意を新たにしたところで、ふと引っ張られている方の手の甲が目に入る。

「……んん？」

そこには、怪しく光る謎の紋章が刻まれていた。

「なんだ……コレ？」

